

第七章 終戦

第一節 終戦

第一項 絶望的抗戦へ

戦争指導体制の動揺

太平洋戦争の開戦と同時に、政府は第七八臨時帝国議会を召集し、開戦に伴う臨時軍事予算、戦時立法などを審議した。また政治面では、政治活動への規制を強化した言論・出版・集会・結社等臨時取締法案が審議され、戦争終結と共に廃止となることを確認のうえで可決されている。

昭和十七（一九四二）年四月、第二一回総選挙が行なわれた。この選挙は「候補者推薦制度」が導入された、いわゆる「翼賛選挙」として知られている。政府による候補者推薦は憲法上の規定に反するため、新たに結成された「翼賛政治体制協議会」が候補者推薦を行うことになっていたが、それが建前に過ぎないことは誰の目にも明らかであった。推薦制を公然と批判した候補者のほとんどが非推薦となり、それ以外の現職議員はほぼ全て推薦されていたためである。総選挙の結果は、推薦候補三八一名、非推薦候補八五名が当選を果たした。同協議会は選挙後に解散し、新たに「翼賛政治会」が結成される。この翼賛政治会は、戦勝までの挙国一致を維持する為の時限的な「戦時政党」とされ、一部を除いた全議員が加入していた。

その後は戦局の好調もあり、しばらく政府と翼賛政治会の蜜月は続く。しかしアメリカの本格的反攻により、東條内閣が昭和十八年一月の第八一帝国議会において、決戦体制強化のため大幅な増税と政府権限の強化をめざす一連の法案を提出したことで、議会は大荒れとなった。とくに治安対

策強化のための戦時刑事特別法改正案、経済統制の権限強化を目的とした戦時行政特例法案などをめぐって、「東條独裁」という批判が、斉藤隆夫や中野正剛から発せられていた。また先の選挙における推薦制度がこのとき問題とされ、東條もこの後は推薦制度を実施しないことを明言している。

こうした議会との対立をうけて東條は内閣改造を断行する。翼賛政治会から閣僚を迎えることで議会との関係修復を図ったのである。しかし同年六月、第八二回臨時議会が開かれると中野や鳩山一郎といった政府との協調姿勢に飽き足らない議員による政府批判の動きが再び活発化する。鳩山は会期延長を主張し、さらに中野は東條内閣の独裁を攻撃し、翼賛政治会にも「茶坊主ばかり集まっている」と痛烈な批判を浴びせたのである。こうして中野や鳩山、三木武吉ら五名は翼賛政治会を脱会した。以後鳩山らは議会にほとんど出席せず、これが結果として彼らの戦後の強みとなった。

一方、中野は反東條を鮮明にし、七月頃から岡田啓介や近衛文麿といった重臣（主に元総理経験者）と密会を重ね、東條内閣打倒のため重臣工作を開始していた。しかし十月二十一日、中野は治安当局によって逮捕され、二十七日には自殺に追い込まれている。このように、反東條を鮮明に示すことはきわめて危険であったのである。

東條内閣の崩壊

昭和十八年五月二十九日にはアリシューシャン列島アツツ島守備隊が全滅している。太平洋戦争におけるはじめての「玉砕」である。このようにアメリカ軍の本格的反攻が誰の目にも明らかになっていくなか、日本では戦争指導体制の根本を揺るがす問題に直面していた。直接の引き金となったのは石油と航空機の問題である。南方占領地域からの石油輸送は戦争前の

予定を大幅に下回り、陸海軍ともに戦前の備蓄を食い潰す状況に陥っていた。軍は石油の確保を政府に要求し、民間用の石油を軍に転用することで何とか合意を見た。しかし消耗の著しい航空機生産の配分をめぐることは陸海軍ともに一歩も譲らず、同年九月三十日の御前会議で、陸海軍は合計五万五〇〇〇機もの航空機生産を要求した。しかし実際の生産数はその三割程度に留まっており、いかに過大な要求であったかがわかる。

一方、政府は十一月一日に軍需省の新設を決定する。政府が軍需生産の一元的管理を行なうことで陸海軍の縄張り意識を解決し、生産効率をあげようというのがその狙いであった。東條は自ら軍需相を兼務して「陣頭指揮」の決意を示したが、状況は全く変わらなかった。「絶対国防圏」がはやくも破綻を見せ始めていく局面で、陸海軍は「分捕り合戦」を繰り返していたのである。

こうした状況下で、東條は自ら参謀総長を兼任すると共に、嶋田海相に軍令部総長を兼任させる動きに出た。軍政・軍令双方の指導権を両者に集中させることによって、陸海軍の抗争を解決しようとしたのである。杉山元参謀総長は「統帥権の独立」を盾に抵抗したが、天皇は杉山に「お前の心配は朕もそう思った。東條にその点は確かめた。東條もその点は十分気をつけてやると申すから安心した……非常の変則ではあるがこれで立派にやってく行く様協力してくれ」（『杉山メモ』）と告げたのである。こうして、東條と嶋田の総長兼任は決定した。

だが、東條首相兼陸相兼軍需相が参謀総長まで兼任して、まさに空前の権力を掌握したとき、すでに戦局は絶望的な状況に陥っていたのである。

東條内閣に対する不満が決定的なものとなったのがサイパン島の陥落であった。東條が「難攻不落」と豪語したサイパンがもろくも陥落したことで、東條の戦争指導そのものが疑問視されたのである。重臣たちは水面下

で密談を重ね、内閣退陣に向って政局は一気に流動化した。こうした倒閣の空気を察知した東條は参謀総長を辞任し、さらに嶋田海相と岸信介國務相の更迭による内閣改造で事態の打開を図った。しかし七月十七日の重臣会議で、東條から入閣要請を受けていた米内光政海軍大将の入閣を固辞させることを決定し、東條の動きを封じた。こうして進退窮まった東條は、七月十八日、ついに総辞職に至ったのである。

このころ、ヨーロッパ枢軸国もまた敗北という最終的帰結に向っていた。昭和十九年六月、ノルマンディ上陸作戦を成功させた連合国軍は各地でドイツ軍を打ち破り、ドイツ軍の西部戦線は同年末にはドイツ国内にまで後退していた。そして東部戦線においても、ソ連軍はドイツ軍をポーランドまで押し返していた。ドイツの敗北はすぐ目の前まで迫っていたのである。

「捷号」作戦の決定

サイパン陥落によって戦争指導方針の再検討を迫られた大本営は、昭和十九年七月二十四日に新たな作戦計画を決定する。その内容は、本年度後期に国力の徹底的重点（七、八割）を主敵である米軍の侵攻に対する決戦的努力に傾倒させ、残りをもって長期戦的努力を強化するというものであった。つまり本土防衛体制を整備しつつも、米軍に打撃を与えることで、日本にとって有利な和平に向けての状況を生み出そうというものであった。

作戦名は「捷号作戦」と名づけられた。これは米国の侵攻を（一）フィリピン、（二）沖縄・台湾及び揚子江下流地域、（三）北海道を除く本土、（四）北海道・千島・樺太、という順番と予想し、それぞれに一号から四号までをあてたものである。そして「捷一号」作戦計画に従い、陸軍は第一四方面軍を新設し、九月二十六日に山下奉文大将を軍司令官に任命し

た。

だが大本营自身も、「本件は最早能否を超越し国運を賭して断行せられべきもの」といつているように、捷号作戦計画に自信を持っていたわけではなかった。なぜなら、日本の戦争遂行能力自体が失われつつあることがこの時点であきらかになっていたのである。同年八月十一日には、藤原銀次郎軍需相が物的国力の推移と今後の見通しについて、次のように述べていた。

徹底的に重点を形成せる軍需生産においても一九年度初頭を頂点として爾後は低下の傾向にあるを否定し得ず。また現状程度の国民生活を維持することも逐次困難となる趨勢にあり。すなわち戦争第四年たる一九年末には、国力の弾撥力はおおむね喪失するものと認めらる

しかし、八月十九日の最高戦争指導会議で決定された「今後採るべき戦争指導の大綱」では、捷号作戦の「成否及国際情勢の如何に拘らず……飽く迄戦争の完遂を期す」と、あくまで戦争継続の方針に変化はなかった。捷号作戦に「国運を賭し」ての勝利に一縷の望みをつないでいたのである。

一方、アメリカ軍機動部隊は、同年八月三十日の硫黄島と小笠原諸島への空襲を皮切りに、九月九～十四日にはフィリピン中南部を襲う。一連の攻撃で日本軍の防備が手薄なことを知った米軍は、レイテ上陸作戦の実施を前倒して決定し、レイテ上陸を十月二十日と定め、レイテ攻略の後、陸軍はルソン島、海軍は硫黄島と沖繩の攻略と、それぞれの攻撃分担任を決定したのである。そしてこの作戦計画に従い、アメリカ機動部隊は十月十日から沖繩・ルソン島・台湾などを攻撃した。これに対し南九州、沖繩に展開する日本陸海軍航空部隊は反撃に転じ、十九日、大本营は空母一一、戦艦二など一七隻を撃沈、空母八、戦艦二など二八隻撃破という「大戦果」を発表した。世に言う台湾沖航空戦である。

国民は久しぶりの大戦果に狂喜したが、実際の戦果は重巡一、軽巡一、小型空母二の大破に留まり、撃沈は一隻もなかった。こうした「虚報」が生じた直接の原因は、技量の未熟な航空機搭乗員が戦果の判断を誤ったことであつたが、希望的観測に基づいて「大戦果」を鵜呑みにした大本营にこそ大きな責任があろう。そして、こうした希望的観測のツケが、レイテ決戦という「幻想」となつて現れるのである。

連合艦隊壊滅す

十月二十日、マッカーサー率いる米軍は日本軍の散発的な抵抗を排除しながらレイテ島タクロバン付近に上陸した。「私は帰つてきた(I Shall Return)」という、歴史に残る有名な台詞は、このときマイクを通してマッカーサーが行つたものである。

一方、米軍の大船団がレイテ湾接近を知つた大本营は、十月十八日に「捷一号」作戦の発動を命じた。だが、台湾沖航空戦の戦果を鵜呑みにした参謀本部と南方軍(総司令官寺内寿一元帥)は、ここで重大な錯誤を犯す。二十一日にルソン地上決戦という既定方針を急遽変更し、レイテでの地上決戦を決定したのである。制空権を失つた海域へ輸送船団で兵員を送り込むという方針自体が、まさに机上の空論であつたというよりない。だがこの決定は、連合艦隊のレイテ湾突入が成功すれば、米軍を一気に壊滅できるといふ判断からなされていた。その意味で作戦の成否の鍵は、連合艦隊のレイテ湾突入が成功するかどうかにかかっていた。そのため連合艦隊は次のような艦隊編成のもとに、まさに総力をかけて臨んだのである。

栗田艦隊(第一遊撃部隊・主隊) 栗田健男中将(第二艦隊司令長官)

戦艦五(大和・武蔵・長門・金剛・榛名)、重巡十、軽巡二、

駆逐艦十五

西村艦隊(第二遊撃部隊支隊) 西村祥治中将(第二艦隊第二戦隊司令官)

戦艦二（扶桑・山城）重巡一、駆逐艦四

志摩艦隊（第二遊撃部隊）志摩清英中將（第五艦隊司令長官）

重巡二、軽巡一、駆逐艦四

小沢艦隊（機動部隊本隊）小沢治三郎中將（第三艦隊司令長官）

空母四（瑞鶴、瑞鳳、千歳、千代田）、航空戦艦二（日向、伊勢）、軽巡三、

駆逐艦八

十月十八日、連合艦隊は（一）小沢艦隊がアメリカ機動部隊を牽制している間に、（二）栗田艦隊が二十四日にレイテ湾に突入し敵攻略部隊を全滅させ、（三）志摩艦隊と西村艦隊は個別にレイテ湾に進出して栗田艦隊を支援し、（四）フィリピンの海軍航空部隊もこれに呼応して敵航空部隊を撃滅するという、「壮大」な作戦計画を決定した。

二十二日、栗田艦隊と西村艦隊はブルネイを出撃し、志摩、小沢の両艦隊も一斉に南下を開始した。しかし二十三日早朝には、栗田艦隊はパラワン島西方でアメリカ軍潜水艦に雷撃され、重巡二隻撃沈、重巡一隻大破という損害を被った。さらに栗田艦隊は午前十時二十六分から午後三時三十分にかけて五回に及ぶアメリカ軍艦載機、のべ二五〇機の波状攻撃にさらされた。航空機の援護のない大艦隊はまさに格好の標的でしかなく、集中的に狙われた武蔵は午後七時三十五分、海中に姿を消した。世界最強の戦艦と謳われた武蔵のあえない最後であった。

一方、おとりの任務を課されていた小沢艦隊は二十四日から二十五日にかけてアメリカ機動艦隊の猛攻を受け、空母を全て撃沈されながらも、機動部隊を北方に牽制するという作戦目的を果たすことには成功していた。

これに対し、二十五日早朝スリガオ海峡に突入した西村艦隊は、アメリカ艦隊の待ち伏せにあり、駆逐艦一隻を除いて全滅し、あとに続いた志摩艦隊は突入を諦めて反転している。

同じ二十五日早朝、レイテ湾に向って進撃を続けた栗田艦隊はサンベルナルジノ海峡を突破してサマル島の東に進出し、そこで敵護衛空母艦隊と遭遇し、空母一隻と駆逐艦三隻を撃沈させた。その後も栗田艦隊はレイテ湾への進撃を続けたが、午後零時三十分、突如反転したのである。反転の理由は定かではないが、こうして戦機は永遠に去ったのである。

一連の海戦によって、アメリカ軍は特攻機による損害を含め小型空母一、護衛空母二、駆逐艦一二、護衛駆逐艦一、その他八隻を失った。しかし連合艦隊は、戦艦六、空母三（ほか改装空母四）、重巡七、軽巡七隻を残すばかりとなった。ここに連合艦隊は事実上壊滅したのである。

こうして日本は、太平洋地域における制海権を完全に喪失した。にもかかわらず大本営は、レイテへの増援部隊投入を止めなかった。しかし輸送船団が次々と撃沈されたため、十一月中旬には早くも食料が底をつき、レイテは「飢島」となった。飢餓の日本軍は各地で全滅し、ついに十二月二十五日、作戦中止命令が出された。日本軍の損害は、輸送途上の死者を含め戦死七万九五六一人に及ぶものであった。千歳出身の石垣鏡平（兵長）も十二月二十二日、同島で戦死している。無謀な作戦を強行した結果は、あまりにも無残であった。

第二項 沖縄戦と千歳出身の兵士たち 硫黄島から沖縄へ

フィリピンの大半を制圧したアメリカ軍の次なる目標は硫黄島であった。東京都・サイパン島の双方から約一二〇〇^キの地点に位置する硫黄島は、米軍の戦略上きわめて重要な意味をもっていたのである。

昭和二十年二月十九日、約七万五〇〇〇名のアメリカ軍は、硫黄島へ上陸を開始した。栗林忠道中將以下約二万三〇〇〇名の陸海軍守備隊は、上

陸軍に対する直接攻撃を行わず、縦横に構築した坑道陣地にたてこもって米軍に出血を強要する持久戦術に出た。そのため事前の砲爆撃三日、上陸後五日で占領というアメリカ軍の予定は大幅に狂い、三月二十六日に栗林中将が自決するまで、およそ一ヶ月にも亘る壮絶な戦闘が開かれたのである。日本軍の戦死者約二万一〇〇〇名に対し、アメリカ軍は合計二万八八六名にのぼった。硫黄島戦は、アメリカ軍の死者数が日本軍を上回った唯一の戦闘となったのである。

なお、硫黄島の戦闘においては戦死した兵士のなかには千歳出身者も含まれている。同年一月十三日、小池栄三一等兵が同島で戦死している。小池はおそらく上陸前の空爆によって戦死したものと思われる。また栗林以下、残存兵力による最後の「総攻撃」で、鈴木悦郎（軍曹）、三宅茂（軍曹）の戦死が確認されている。

一方、沖縄では約二個師団半を基幹とする陸軍第三二軍（司令官牛島満中将）約八万六四〇〇名と、海軍の沖縄方面根拠地隊（司令官大田実少将）約八〇〇〇名が、決戦に備えて陣地構築を急いでいた。だが第三二軍の内実は、各地から転属した雑多な部隊から構成された「寄せ集め」であり、装備も貧弱であった。こうした兵力不足を補うため、日本軍は民間人の召集に乗り出す。満一七歳から四五歳までの県民男子約二万五〇〇〇名を召集し防衛隊や義勇隊として各部隊に配属し、さらに昭和二十年三月には、師範学校男子部や中学校などの男子生徒一七八〇名からなる鉄血勤皇隊と、師範学校女子部や高等女学校などの女子生徒五八一名による女子学徒隊、いわゆるひめゆり部隊が、相次いで結成されたのである。鉄血勤皇隊は戦場で銃をとって戦い、女子学徒隊もまた従軍看護婦として野戦病院で働きつつ、ときには食料や弾薬の運搬係となって戦闘に参加し、痛ましい最期を迎えることとなる。

凄惨な沖縄戦

三月二十六日、米軍は猛烈な砲爆撃のち、慶良間列島へと上陸を開始した。これをみた安藤利吉第一〇方面軍司令官（第三二軍の上部組織）と豊田副武連合艦隊司令長官は、同日、陸海軍合同による「天一号」航空作戦の発動を命じ、ここに沖縄戦が開始された。

四月一日、アメリカ軍は沖縄本島中部西側の北谷、読谷山海岸へ大挙上陸し、北・中両飛行場を占領した。日本軍もまた敵の上陸地点を本島中部西側海岸と予想していたが、兵力不足を理由に主力部隊を南部に配置し、硫黄島と同様に坑道陣地を張り巡らし、さらに起伏に富む地形を利用した陣地を築いて、アメリカ軍の出血を強いる作戦をとったのである。

日本軍の抵抗によりアメリカ軍は苦戦を強いられ、首里を占領するのに五日を要している。同時に、日本軍は特攻攻撃を繰り返した。陸海軍航空部隊による特攻攻撃に加え、四月七日には戦艦大和以下一〇隻（第二艦隊、伊藤整一中将）が沖縄を目指して出撃した。いわゆる大和特攻である。だが、大和は屋久島西方約二六〇キロの海上で沈没し作戦は失敗に終わった。だがこうした特攻をもってしても、戦局を挽回することはできなかった。五月二十七日には、首里城から退却した牛島中将らは、摩文仁の丘に司令部を移して抵抗を続けた。しかし日本軍はあちこちで全滅し、六月二十三日、牛島中将は自決し、日本軍の組織的な抵抗は終わった。

千歳出身の兵士たち

沖縄戦には、千歳出身の兵士たちも参加していた。そして他の日本軍兵士たちと同様に、彼らの多くもまた壮絶な戦闘のなかで戦死している。

まず、米軍上陸後から首里陥落までの戦闘のなかで、滝川順一（伍長）、堀春雄（伍長）、（城間（地区））工藤敏友（准尉）、（前田）山崎政一（伍長）、小山田竹松（伍長）、田巻正蔵（兵長）、芦谷己代一（兵長）（首里）

奥田秀男（軍曹）、出口作次郎（伍長）、菊地正吉（兵長）、〔中間〕宇佐美波一（伍長）、〔経塚〕前田利郎（兵長）、〔真壁〕天坂留蔵（伍長）、〔平良〕村中太市（軍曹）、〔国吉〕沖中明義（伍長）、小野寺栄吉（伍長）、〔伊江島〕鈴木末吉（伍長）、〔沖繩群島〕阿部照雄（軍曹）、〔場所不明〕榊原賢（兵長）、坂井担（伍長）の戦死が確認されている。

そして首里撤退後の戦闘において、〔新垣〕加藤初久（伍長）、川島二作（伍長）、〔国吉〕佐々木誠（軍曹）、今克之（兵長）、〔首里〕山川勲（伍長）、〔真栄里村〕木村喜一郎（軍属）、〔真栄平〕武藤季雄（兵長）、小山悦二（少佐）、〔真壁〕元木覚正（伍長）、〔摩文仁〕本田信一（軍曹）、〔字仁城〕木村義男（伍長）、〔場所不明〕木下小一（兵長）、今井進（軍曹）が戦死している。

また、日本軍の組織的抵抗が終了した後も散発的な戦闘が続き、場所は不明であるが、七月十三日には岡聖熙（曹長）、八月十日には山口芳夫（伍長）が戦死している。以上挙げたほか、時期は不明であるが那覇において小森銀治（伍長）が戦死している。

沖繩戦と住民たち

沖繩戦が悲惨なものとなったのは、軍人・軍属を上回る沖繩県民の死者を出したことに尽きる。一説には一〇万人を上回るとも言われる死者を生み出した背景には、三三軍が住民に対する適切な措置を講じようとしなかったことをまず挙げねばならない。長勇参謀長は、昭和二十年一月二十七日の「沖繩新報」で次のように述べていた。

敵が上陸し……一般県民が餓死するからといったって、軍はこれに応ずるわけにはいかない。軍は戦争に勝つ重大任務の遂行こそが使命であって、県民の生活を救うために、負けることは許されるべきものではない。

もちろん、「鉄の暴風 (Typhoon of Steel)」と称されたアメリカ軍に

よる無差別砲撃は、軍事目標のみならず住民の生活を破壊しつくしたことは事実である。だが三三軍が適切な措置（非戦闘員の避難など）を事前に講じておけば、少なくとも住民の「生命」が奪われる事態にまでは至らなかったはずである。しかし三三軍首脳が住民の保護について、かくも粗雑な観念しか持ち合わせていなかった以上、住民が戦場で悲惨な結末を迎えることは避け得ぬものであった。戦闘の「邪魔者」扱いされた住民は戦火のなかを逃げ惑い、さらに一部の住民たちは「集団自決」へと追い込まれていったのである。

第三項 ポツダム宣言受諾へ

鈴木内閣の成立と和平工作

東條内閣のあとをうけて発足した小磯國昭内閣は「戦争完遂」「国難突破」などをスローガンに掲げ、最高戦争指導会議（首相、陸海外相、陸海総長）を設置し、首相自らが戦争指導できる体制作りを目指したが、悪化する戦局になら有効な手を打つことが出来なかった。政戦両面に無力ぶりを曝け出した小磯内閣は重臣たちに見切りをつけられ、昭和二十年四月五日に総辞職し、かわって成立したのが鈴木貫太郎内閣である。鈴木を後継に推した重臣たちは、鈴木内閣をもって終戦内閣と考えていたが、こうした和平への動きを陸軍は察知し、鈴木内閣に対する警戒を強めていた。さらに四月五日にはソ連から日ソ中立条約の廃棄が通告されていた。鈴木内閣の前途ははじまりから多難であった。

一方、同年四月二十二日にはソ連軍がベルリン市内へ突入し、四月三十日にヒトラー総統は総統官邸地下壕で自殺。そして五月八日、ドイツは無条件降伏し、ヨーロッパにおける戦争は終結したのだった。

五月十一日、最高戦争指導会議において（一）ソ連参戦防止、（二）ソ

連の好意的中立の保持、(三) ソ連による和平の有利なる仲介という三項目が国策決定された。この決定は、はじめて日本が和平の方針を公式に決定した点で非常に重要である。いかにドイツの降伏が日本に衝撃を与えたか理解できよう。

そして沖繩戦の敗北が決定的なものとなった六月二十二日、天皇は最高戦争指導会議のメンバーを召集し、「戦争の終結についても、この際従来の観念に捉われることなく、速かに具体的研究を遂げ、これが実現に努力するよう望む」と発言する。このときはじめて天皇が和平への意志を示したことで、ソ連を仲介とする和平工作が具体的に開始されることとなった。鈴木内閣は近衛を特使としてモスクワに派遣することを決定し、七月十三日にソ連にその旨を申し入れたが、ソ連側ははつきりと返事をしないまま、ただ時間だけが経過していった。

しかし同年二月四日、ルーズベルト、チャーチル、スターリンの三国首脳によるヤルタ会談において、ドイツ降伏から二、三カ月をもってソ連が日本に宣戦布告することはすでに決定されていた。和平の仲介など、ソ連が応じようはずもなかったのである。

原爆投下とソ連参戦

七月二十六日、ベルリンのポツダムにおいてトルーマン、スターリン、チャーチルの三者は会談を行ない、翌二十七日、米英中の三国の名で日本への降伏が勧告された。これがポツダム宣言である。宣言は、軍国主義の除去、領土の制限、軍隊の武装解除、戦争犯罪人の処罰などが明記され、即座に降伏する以外の「日本国の選択は、迅速かつ完全な壊滅あるのみとす」と明確に記されていた。しかし最高戦争指導会議では、ソ連の態度がはつきりするまで見送ることに決し、政府の公式見解は出さないことに決定していた。だが翌日の新聞は「笑止！自惚れを撃破せん」といった記事

が踊り、軍部からの圧力も加わり、鈴木は記者会見の場で政府の見解を述べることになった。ここで鈴木は「ポツダム宣言に関しては重大な価値があるとは思えない。ただ黙殺すると共に、断固戦争完遂にまい進するのみである」と答えたのである。この発言自体は鈴木の本心というより、あくまで国内(軍部)向けの発言であったが、不用意には違いなかった。「ノー・コメント」を意図したであろう「黙殺」という言葉は、海外では「拒絶(No)」と報じられてしまうのである。

連合国は、日本はポツダム宣言を拒否したものとみなし、八月六日、テニアン島から発信したエノラ・ゲイ号は広島へ原爆を投下した。ついで九日は長崎へ原爆が投下された。原爆は二つの都市を一瞬にして破滅し、数十万の無抵抗の市民たちが殺された。

そして八月八日、ソ連は日本の大使を呼び出した。そこで告げられたのは、和平仲介の返事どころか、日本への宣戦布告の通告だった。翌九日からソ連軍は南樺太、満州、朝鮮に侵攻を開始した。もはや昔日の面影なき関東軍は、居留日本人を見殺しにひたすら敗走するばかりであった。

原爆の投下とソ連侵攻は、日本の息の根を完全に止めたといっている。原爆の報告をうけた天皇は「このような兵器が使用される以上、戦争継続はいよいよ不可能となった」と述べ、戦争終結を急ぐよう鈴木に命じた。そしてソ連の参戦が伝えられたことで、鈴木は直ちに最高戦争指導会議を招集する。すなわち、ポツダム宣言の受諾か、または本土決戦か、もはや日本にはこの二つ以外の道が残されていないことを悟らざるを得なかったのである。

ポツダム宣言の受諾と敗戦

八月九日早朝に開かれた最高戦争指導会議において、陸軍は受諾にあつても(一) 国体護持、(二) 武装解除、(三) 戦争犯罪人の処罰は日本

側で行なうこと、(四) 連合軍の占領は拒否という四条件が譲れないと主張した。一方、鈴木を始めとする受諾賛成側は(一)のみを条件に受諾すべしと主張した。うかつに条件を出せば連合国側が態度を硬化させ、和平自体が不成立になってしまふと主張したが、陸軍は和平が不成立になっても「必ず勝つとはいえないが、本土決戦でうまくいけば連合軍に打撃を与えられ、よりよい条件が引き出せるかもしれない」と主張し、会議は割れた。結論が出ないまま会議は一度散会し、閣議後に再開することになった。なおこの会議の最中、長崎に原爆が投下されている。閣議は午後十時になっても結論は出ず、午後十一時三十分、御前会議の形式としての最高戦争指導会議が開催された。

この会議で鈴木は、乙案(四条件)と甲案(国体護持のみ)の二案を示したのち、

議を尽くすことすでに数時間、なお議決せず、しかも事態は遷延を許さず。

かくなる上は、はなはだ恐れ多きことながら……聖慮をもって本会議の決定としたし

と発言した。鈴木は昭和天皇の「聖断」(天皇の意思に基づく判断や決定)を願いだしたのである。天皇は甲案に賛成として、次のように述べた。

本土決戦というけれど、一番大事な九十九里浜の防備も出来て居らず……

どうして戦争に勝つことが出来るか……今日は忍び難きを忍ばねばならぬと
きと思う……自分は涙をのんで原案に賛成する

天皇の言葉が、そのまま会議の結論となった。外務省はただちに中立国を通じて連合国に受諾の電文を發した。しかし連合国からの回答には、降伏後の天皇及び日本国政府の国家統治の権限は、連合国司令官の「制限のもとにおかれる(subject to)」、さらに「最終的に日本国の政府の形態は……日本国民の自由に表明する意志により決定せらるべきものとす」

と記されていたのである。陸軍は、これでは国体護持が保障されないとし、再びポツダム宣言受諾の拒絶を主張したのである。

十四日、天皇は一部軍人・閣僚と最高戦争指導会議構成員による御前会議を開くよう命じ、この場で天皇は、あらためて次のように述べた。

私の考えはこの前申した事に変わりはない。私は世界の現状と国内の事情とを充分検討した結果、これ以上戦争を継続することは無理だと考える……自分はいかにならうとも万民の生命を助けたい。これ以上戦争を続けては結局我邦が全くの焦土となり、万民にこれ以上の苦悩を嘗めさせる事は私としては実に忍びがたい……一般国民には今まで何も知らせず居ったのであるから……この際私としては為る事があれば何でも厭わない。国民に呼びかける事が良ければ私は何時でも「マイク」の前にも立つ

この天皇の「聖断」によって、日本の降伏が決定したのである。

その一方で、十四日未明に陸軍の一部将校による終戦阻止クーデターが執行されていた。叛乱軍は決起に反対する森越近衛第一師団長を殺害し、偽の師団長命令を發して宮城と放送局の占拠を図り、さらに反乱軍の一部は宮内省に突入し、天皇の終戦詔勅朗読を録音した「玉音盤」奪取を目論んだのである。しかし叛乱は陸軍首脳部の反対によって直ちに鎮圧され、クーデターは失敗に終わった。

そして翌十五日正午の「玉音放送」によって、国民ははじめて戦争が終わったこと、日本が負けたことを知ったのである。

九月二日、戦艦ミズーリ艦上で降伏文書調印式がおこなわれ、日本全権として重光葵前外相、梅津美治郎参謀総長が降伏文書に署名した。こうして三年八ヵ月に及んだ太平洋戦争は、大日本帝国の敗北をもって終わりを告げたのである。

参考文献

伊藤隆『日本の歴史三〇 十五年戦争』小学館 一九七六年／半藤一利『聖断
天皇と鈴木貫太郎』文藝春秋 一九八五年／木坂順一郎『新版昭和の歴史七 太
平洋戦争』小学館 二〇〇一年／古川隆久『戦時議会』吉川弘文館 二〇〇一年
／吉田裕『シリーズ日本近代史六 アジア・太平洋戦争』岩波新書 二〇〇七
年／千歳町『千歳町戦没者追悼写真帖』一九五四年

第二節 戦後混乱期の街と行政

第一項 終戦の空

終戦の千歳基地と終戦処理

昭和二十年八月十五日、日本は三年八カ月に及んだ米英など連合国との
総力戦に敗れた。盧溝橋事件からは八年目のことだった。ポツダム宣言受
諾を決め玉音が録音された「日本のいちばん長い日」が明け、千歳は朝か
ら太陽がきらきらと照りつける夏の日だった。

重大放送は正午からであった。朝から、正午に重大放送があるので所定
の場所において聞くように指示されていた。

第一千歳では午前十一時四十五分頃、「総員整列」の館内放送とラッパ
が鳴った。基地内で最も大きな山形格納庫に十二航艦司令長官、北東空司
令長官ほか士官が第一種軍装に威儀を正し直立不動で整列した。下士官と
兵は入りきれず拡声器で放送を流した。第一千歳には霞空千歳派遣隊等の
外来部隊も多く、士官総員が格納庫内に入ることができず、霞空派遣隊員
は士官室や講堂などで玉音を拝聴した。

第二千歳の五七一設営隊は滑走路の二五〇〇メートル延伸作業最終日であった
ことから技術士官も現場に出ている。技術士官と設営隊員、徴用工などは
設営中の滑走路北端東側にあった工場地区整備場附近に整列した。営庭に
整列できたのは兵舎に残っていた五、六〇人と食事当番の三〇人程度と少
数だった。

第三千歳の天雷部隊は、滑走路中央部西側の指揮所前に整列した。

空廠本部前、隧道の分散工場前広場にも将兵、工員、挺身隊員が集まっ
た。それぞれの集合場所で、部隊長が壇上に立った。

正午、日本放送協会のアナウンサーが「ただ今より重大な放送がありま

す…これより慎みて玉音をお送り申します」と謹言した。情報局総裁の下村海南（本名宏）が天皇自ら詔勅を朗読することを説明した。

君が代の演奏に続いて『終戦の詔勅』・玉音が放送された。

玉音のポイントは冒頭の「朕ハ帝国政府ヲシテ米英支蘇四国ニ対シテ其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨通告セシメタリ」というポツダム宣言の受諾にあった。一段高いところに置かれたラジオからの玉音は、受信状態が悪く雑音が多かったため良く聞き取れなかったが、「万世ノタメニ泰平ヲ開カント欲ス」という言葉が明瞭だったという。多くの士官は「泰平」という言葉で戦争が終わった、日本が降伏したのだということ直観的に判断したというが、全く放送の内容が理解できない者もいたという。放送後、兵の中には俯して泣きじゃくる者も多かった。

第二千歳滑走路脇に整列した設営隊員は、涙と安堵の交錯した複雑な表情で立ち尽くしていた。

第二千歳で一三〇機銃陣地の指揮をとっていた神埜努は、指揮所前で玉音を聞き終えた後、前列のほうで陸軍の将校が嗚咽し続けているのを見た。「終戦当時、天雷部隊長が園田直とは知らなかったが、今思えば、嗚咽していた陸軍将校は彼でなかったのかと思っている」と語った。

園田は挺進第一連隊の別中隊が先に義烈空挺隊として沖繩に突入しているが、それに続かなかったことが申し訳なく悔しかったのか。

その第三千歳・天雷部隊の園田は、重大放送は昭和天皇から親しく激励を賜るのかと思つたという。玉音は聞き取りにくかったが「停戦せよ」との仰せであると理解し、部下にもそう説明した。しかし、しばらくして日本が負けたということがわかり部隊は騒然とした。出撃の日程も決まり血気盛んな下士官の中には、一時、わめき散らし、大声で怒鳴って日本刀で三角兵舎の柱や立ち木に切りつけるものが大勢いた。

園田は十七日、予定の発進基地であり、徹底抗戦を叫ぶ小園部隊がいる厚木に前進するため松島に飛んだが、この日に発せられた『陸海軍人への勅語』「…汝等軍人克ク朕ガ意ヲ対シ鞏固ナル団結ヲ堅持シ出処進止ヲ嚴明ニシ千辛万苦ニ克チ忍ビ難キヲ忍ビテ国家永年ノ礎ヲ遺サムコトヲ期セヨ」を拝し、自らの行動を抑えた。千歳から乗ってきた陸攻は、君が代のラッパ吹奏が流れるなか火を放たれた。

藤井貞雄の『千歳特攻隊始末記』に、終戦を迎えた手記が掲載されている。

「死」から「生」へ 石橋 清男（予生1期）

八月十五日、第一種軍装に着替えて講堂に集合し、重大放送を聞いたが、雑音がひどいため「耐えろがたきを耐え、しのび難きをしのび」という一節だけがなんとか聞きとれた。やはり負けて、これで戦争が終わりになるなと、おぼろげながら状況を判断した。

ついに来るものが来たなという気持ちだったが、なにかあまりにもあつけない幕切れで、いままで張りつめていた気持ちがいっぺんにゆるみ、放心状態で一日を過ごしたように思う。（略）

―寄せ書き―（抜粋）

お互い招魂社に行ける と思つたに 無念なり 又紅葉ヶ丘で踊ろうぞ

石橋拓兄 二十年八月二十五日 岡部 衷（予生14期）

復員が始まった。敗戦から二、三日のうちに千歳に派遣されていた部隊は原隊に戻った。霞空千歳派遣隊の一部、零戦四〇機は十七日に松島経由で特攻発進基地の谷田部に移動した。千歳にいた各部隊の北海道出身者は、そのまま帰郷した。大部分の部隊は残務整理を行った後、八月下旬までに解散式を終えた後に復員した。五七一をはじめとする設営部隊は二十日に解散式を行った。剣作戦のため千歳に配備されていた一式陸攻は鈴

鹿に帰投した。

『警察沿革史』に敗戦当時の基地の混乱振りを見る。

八月十五日終戦の大詔下るや、海軍側の解隊となりたるも先づ第一に、陸軍憲兵隊の解散なり。(略) 戦争当時の羽振りと横暴は人々の響響を買ひしが、昔語りとなる。(略)

十月末海軍も復員終了して十二月末全く其の影を没せり。

飛行場に残れる日の丸の飛行機幾十機、油をかけて黒煙天に上るを見るとき、在郷軍人分会旗の神社前にて解散焼失せる様、何人と雖も涙の出るは人情の常とし、敢て米国を憾むべきものにあらず。

第四十一航空廠官海軍少将梅谷薫、終戦直後自己を失ひ、自らの保身に重点を置き、宗广大佐(総務科長)其の手腕發揮を封ぜられ、独り問所少佐(會計科長)池田書記との横暴、物資の処理に遂に軍法会議の捜査活動さへありたるを見て如何に当時の首脳部の狼狽は誰しも認めざるを得ざると言ふへし。航空隊司令参謀副長海軍大佐大橋恭三のみ沈着事に当り、町役場は勿論有志の督励、更に道庁当局をさえ強固に指導なしたるを以て、進駐軍に対する円滑接渉他に見ざる好結果を収めつゝ、あるを見て、同大佐の手腕度量さしたんの外なし。

終戦当時特筆すべきものに航空廠施設部より放出の物資運搬は、八月末迄の期限内に迫られ、貨物自動車、荷馬車の往来深夜と雖も其の音止まず、夜も安眠容易ならざる状態にあり、混雑其の極に達せり。

引用文中、陸軍憲兵隊とは、現在の自衛隊札幌地方協力本部千歳地域事務所の位置にあつた陸軍北部憲兵隊司令部(札幌)直轄千歳分隊である。千歳基地設営とともに旭川憲兵隊札幌分隊千歳分遣隊として開設され、昭和二十年四月一日の改編で北部憲兵隊司令部の直轄分隊となった。敗戦時の分隊長はポツダム中尉となつた熊山忠治、隊員は一八人の組織だつた。

改編では北部憲兵隊司令部下に四地区隊(旭川・釧路・函館・樺太)が置かれ、各分隊がその隷下に入ったほか、石狩・胆振・日高地域を管轄する分隊(札幌・苫小牧・千歳・室蘭)は直轄とされた。道内海軍航空基地所在地の分隊では千歳のみが直轄になっている。陸軍憲兵隊は海軍所在地においては軍事警察に関して海軍の指揮下にも入つた。

陸軍は昭和十五年に兵科色(歩兵・緋、砲兵・山吹、憲兵・黒など)を廃止したが、憲兵だけが「憲兵」腕章を着用した。また、下士官・兵であつても拳銃と軍刀を所持した。なお、千歳分隊庁舎は閉鎖後、住宅や測量施設に用いられた。二十四年八月から四十八年三月まで涉外労務管理事務所に、同年六月からは自衛隊札幌地方連絡部千歳募集事務所となつたが、平成十年三月五日に改築のため業務を停止し取り壊された。

敗戦から海軍の姿が全くなくなる十二月まで、第一千歳に残留して残務整理にあつた武藤誠は、日本機飛行禁止後の八月二十四日以降に九州陸上(対潜)哨戒機「東海」(Q1W)の対ソ連潜水艦哨戒飛行などを記述している。一部を抜粋する(「いくさ世の回想」)。

敗戦後の千歳基地には、南下するソ連への戦略体制の整備を急ぐ米軍への協力と、多くの兵員の復員、武器弾薬類の破棄という二つの任務を手際よく進めなければならず、多忙をきわめる毎日であつた。その間、士官クラスの人達の復員も進み、日ごとに残留する者が減つていった。

私は、司令の大橋恭三大佐から、

「君と吉澤少尉(父君が外交官でワシントン(公使)、オタワ(大使)に勤務した関係でアメリカンスクールに学び、英語がうまい)は残留してくれ」と、言われた。

こちらも、帰つても大学に復学することだけのことで、のんびりと構えていた。

米軍からは一見して気むづかしそうな中年の空軍大佐がやって来て、兵器類の焼却と海底投棄する作業を指示した。投下用の爆弾、航空機から発射する魚雷といったものは弾薬庫から引き込み線でも入ってくる専用の貨物列車に積み込んで小樽まで運び、舟で沖合の海底に投げ込むのである。

この作業は、些細な取り扱いのミスで大爆発事故が発生することがあるので、神経を使ってやった。(略)

そうしたとき、第二千歳基地を巡回中に、見なれない対潜水艦哨戒機が一機、滑走路に着陸しているのを見付けた。この頃は、すでに、占領軍の命令で、軍用機はいつさい飛行することが出来ず、止むを得ず、どうしても必要な場合は、練習用の「白菊」という機で、尾翼に白い吹流しをつけて飛ぶことだけが許可されていた。(略)それをいまごろ、こんなのがどうしてやって来たのかと、いぶかしく思って近づいて行ったところ、「おい、武藤君じゃないか」と、言うのでよく見ると、学友の角野一郎君であった。(略)話によれば、降伏後、日本海方面に国籍不明の潜水艦(略)が出没して、外地からの引揚者をのせた船、また日本から朝鮮に帰国する人を乗せた船が攻撃されて撃沈されるので、その護衛、監視のためにGHQ(占領軍総司令部)の命令で内地から飛来して来たことであった。(略)

我々がいた航空隊の庁舎に米軍が入ってくるにつれて、連絡、引継ぎ業務を続けていた場所も狭くなり、隊外にある施設に移転することになった。敗戦から三ヶ月近くにもなろうとする頃であった。敗戦直後、三千人近くいたのがわずか二〇人くらいに減ってしまっていた。(略)

住み慣れた庁舎を去るとき、大橋司令が、星条旗を翻している本庁舎をふり返り、「大石良雄の心境だ」と、つぶやいたのが印象に残った。(略)

仮庁舎に移転したあとも、米軍との連絡、接渉に追われた。(略)

こうして残務整理も終わり、やがて、北海道の原野にそろそろ小雪が舞い

おりて根雪となる頃、私も、ここを去ることになった。もう残留しているのは大橋司令のほか数名となっていた。

司令から、「ご苦労だった。もう帰ってよい」と、言われて、一年以上も住み慣れた懐かしい千歳をあとにすることになった。

武藤が千歳を去った前後の十一月三十日、大湊警備府(北海道)事務所が廃庁、海軍省が廃止された。千歳は真夏の敗戦から三カ月、すでに樽前、恵庭など支笏の連山は雪化粧していた。

なお、対潜哨戒機東海による対ソ連潜水艦哨戒飛行は、八月二十二日に樺太からの引揚船が留萌沖においてソ連潜水艦に砲雷撃され、小笠原丸と泰東丸が沈没し第二振興丸が大破、二〇〇〇人近い死者、行方不明者が出た殉難事件の対応のためであった。東海は、潜水艦を探索するため磁気探知機を搭載し、できる限り低速で一〇時間以上に亘る長時間の哨戒飛行が可能で敵潜水艦発見と同時に急降下攻撃ができた。

ソ連は八月九日、日ソ中立条約(昭和十六年締結・有効期間五カ年)を一方的に破棄して参戦、満州に侵入し十五日を過ぎては戦闘を継続した。今次大戦におけるソ連軍最大の屈辱的負け戦となった千島列島占守島に上陸したのが十八日のことだった。その後、択捉島には二十八日、齒舞諸島には九月四日に上陸を開始、ソ連が崩壊しロシアとなった今日まで不法な占拠が続いている。

十一月二十六日付、北海道終戦処理事務所から海軍省軍務局長に当たった北海道終戦処理第二号ノ二八の『大湊警備府/第十二航空艦隊(北海道地区)終戦処理経過報告』をみると、終戦処理事務所は大湊警備府(大警)と十二航艦(12AF)合同の千歳事務所と北海地方海軍部からなっている。

一、北海道終戦処理機関設置

(一) 大海指特第一号ニ依ル北海道(除千島)ニ於ケル終戦処理ハ本年大湊警

備府第十二航空艦隊信電令第三八号ニ依リ北海道地方海軍部長指揮官ニ指定セ

ラレ右事務所ヲ九月三日第一千歳基地ニ設置ス

(二) 北海道終戦処理機関ノ構成左表ノ通(二〇、九、四)

事務分担 官 氏名 記事

全般(指揮官) 少将 菊地 鶴治 北海道地方海軍部長

渉外主務 大佐 黛 治夫 大警参謀副長

渉外 同 市村忠逸郎 海軍部参謀

事務処理主務 大佐 大橋 恭三 北東空司令兼12AF参謀副長大警参謀長

(略)

令 達 文(要約)

九、五 発、大警参謀長 宛、在北海道各部隊指揮官

機密第〇五一七一八番電

海軍省所管国有財産ハ現状ノ俣大蔵省ニ総括引継グコトニ定メラレタル

ニ付之ガ資料左記要領ニテ調製相成度(略)

九、六 発、大警 宛、H T B (執筆者注・北海道千歳基地)

第〇六一四五〇番電 大警12AF信電令第四〇号

部内各種物件(舟艇・車両ヲ含ム)讓渡作業ヲ直ニ停止スベシ(略)

九、六 発、大警 宛、H T B

機密第〇六一四五六番電 大警12AF信電令第三九号

官房第〇五二一一〇番電ニ依ル毎日曜日各地区別現在員数ハ左ノ区分ニ

依リ同日二四〇〇迄ニ必ず到達スル如ク各地区担任官之ヲ取纏メ本職

(北海道地区ハ中央及本職)ニ報告スベシ(略)

九、七 発、海軍大臣 宛、部内一般

機密第〇五二一〇八番電

各庁長ハ連合軍側ニ対シ兵器需品施設ノ引渡ヲ完了スル迄其ノ保管並ニ

授受ノ責ニ任ズベシ

九、七 発、大警 宛、H T B

機密第〇七一〇一一番電 大警12AF信電令第四三号

大警担任地域ニ於ケル海軍保安隊ヲ左ニ依リ編成ス(書類後送)

一、編成

陸上保安隊並ニ海上保安隊トシ各保安隊(主トシテ治安維持ニ任ズ)並

ニ乙保安隊(主トシテ兵器施設物件等ノ保管監視ニ任ズルモノ)ニ区分

ス(海上保安隊略・陸上保安隊は千歳関係のみ抜粋)

(イ) 陸上保安隊 (一) 甲保安隊(大湊地区略)一編成期日 九月七日

(二) 乙保安隊左ノ外甲保安隊ニ準ジ各指揮官所定

七 千歳札幌 指揮官一北東空司令 兵力一五〇〇

(美幌一〇〇、函館・室蘭・宗谷・厚岸・標津根室五〇、小樽三〇)

二、標識 保安隊員白地(縦一五糎 横四〇糎)ニ「N」「P」大湊海

軍保安隊ノ文字ヲ横書セルモノ左腕ニ付ス

三、保安隊用ノ兵器ハ拳銃以下ニシテ(略)棍棒ノミニテ可(略)

一一、一二 発、指揮官 宛、軍務局長 通報、大警参謀長

第二二一四四〇番電

北海道終戦処理事務所ハ二十六日閉鎖ス(略)

『北海道地区』終戦処理経過報告』の卷末に所見が述べられている。

北海道地区における海軍兵器等の接收は、書類が極めて綿密なことも

あつて一部を実視、残りは目録のみで接收するなど順調に推移した。

北海道終戦処理事務所が閉鎖する十一月二十六日現在、二十七日に調印

する美幌地区の爆弾弾薬処理を含め、札幌地区を除き接收処理は完了して

いた。この時点で札幌地区が完了していなかった理由として、北海道には

米海軍の進駐がなかったということにある。このため米陸軍が処理を担当

したが、陸軍では処理困難な航空機用の爆弾弾薬などの兵器もあり接收時期が遅延していた。米海軍は大湊に進駐していた。

爆弾弾薬処理で事故も発生した。九月三十日、小樽港外に機銃弾を投棄作業中のことだった。日本側死者一四名、重軽傷者七名のほか、米陸軍のケンダル大尉も重症を負った。

『北海道地区〕終戦処理経過報告』中令達文の保安隊NPとは、Navy Policeの略称であり、NP組織が海軍再建の礎にとの思いが海軍内部にあった。しかし、占領軍は日本の軍隊を完全に解体することとし、いかなる形でも武装組織を認めなかったという。

残存機と緑十字飛行

防衛省防衛研究所に保管されている米軍命令による海軍省軍務局作成の「昭和二十年九月一日現在海軍基地別保有機種調査（英文）」によると、原隊復帰などを終え道内に残存した機は次のとおりであった。

県名	基地名	海軍飛行機の機種および機数
北海道	稚内	零水6
	第一千歳	零戦28、彗星4、銀河1、一式陸攻9、九三中練74(61)、零式練戦37(32)、白菊3(2)
	第三千歳	陸上哨戒機東海13(11)
	第一美幌	九七艦攻7、天山3、彩雲1、九六陸攻23、一式陸攻8、九三中練20
	第二美幌	九六陸攻5、一式陸攻1、零式輸3、白菊16
	小樽	零水3
	厚岸	零水2

(執筆注・零水＝零式三座水偵、白菊＝機上作業練習機、天山＝艦攻。千歳(一)内数値は『大湊警備府管下引継目録』による可動機数。爆撃機は14機

中10機可動。残存零戦は18機で14機(21型12機、22型1機他)可動)

第一千歳に残存した陸爆銀河は厚木で徹底抗戦を叫んだ小園部隊機で、北海道に復員する下士官が操縦してきたものだった。胴体には「神州不滅」と白ペンキで大書されていた。敗戦時、銀河の爆弾倉には爆弾が満載、格納庫内の中練は特攻に出撃するため暗緑色に塗られ爆装されていた。

第三千歳の東海は、大湊警備府直轄・海上護衛哨戒部隊である九〇三空樺山派遣隊機で、愛知零式三座水偵(E13A)からなる九〇三空稚内・小樽・厚岸派遣隊、占守・択捉型海防艦六隻からなる稚内の一〇四戦隊とともに北海道沿岸に出没する米潜水艦に対する船団護衛、対潜掃蕩の任務に当たっていたと思われる。なお、陸攻・大艇を装備しシーレーンの防衛に任じた海上護衛総隊第一海上護衛艦隊九〇一空の原駐地は千歳であった。残存機は艦砲に俯角を付けると同様に、全機カウリングがなく、プロペラと気化器がはずされ恭順の意を示していた。

陸軍残存機は次のとおりであった。(鈴木徹著『北海道の旧飛行場』参考)	
札幌第一	九七戦14、隼31、屠龍4、重爆呑龍1、キ106-1、偵察機2、練習機19
札幌第二	MC-20等数機
計根別第一	隼2、九九襲撃機9、九八直接協力偵察機2、呑龍1
浅茅野第一	機種不明2 / 浅茅野第二 海軍九九艦爆1
室蘭八丁平	九七戦2、隼1

キ106とは王子製紙江別工場の主要設備を満州造紙に移設したことから、昭和十九年に産業設備営団に供出され愛国一〇一工場となった王子航空機江別製作所が試作した戦闘機である。
キ106は日本の大戦投入機で最も優れ、大東亜決戦機と謳われた中島四式戦「疾風」(キ84)を原型とした木製機で、脚などの金属部品は国鉄

苗穂工機部が、合板作製については北海道工業試験場が技術支援した。

敗戦までに四機が完成、一号機は札幌第一飛行場で五十四戦隊がテスト中に脚が破損し放置され、二、三号機は福生ふっさ（現・横田）の審査部に空輸された。操縦は六十四戦隊・加藤隼戦闘隊の撃墜王・黒江保彦少佐（後に航空自衛隊千歳基地防衛部長・小松基地司令）によって、八月十三日、十六日の両日に行なわれたという。四号機は未だ工場内にあった。空知分工場が、岩見沢の空知農業学校屋内体操場を転用して完成したのは八月十四日のことだった。工作機械は一度も起動することなく敗戦を迎えた。

キ106は疾風と比べ重量が増加したことから上昇性能は劣ったが、トップスピードに遜色はなく、原型の主要特性をほぼ維持した。設計は立川で生産数は呉羽紡富山と合わせ一〇機であった。

十五日以降、日本機は米艦載機の動向を窺いながら飛行していたが、米軍から次の命令を受けた。「日本の飛行機は八月二十四日十六時以降の飛行を禁ずる。飛行するものは撃墜する。戦闘用飛行機は十八日を期限とする」。九月二日には連合国軍総司令部（GHQ）一般命令第一号で日本政府に対して「日本国内の飛行場、航空保安施設に手をつけず、良好な状態で維持せよ」とした。飛行禁止命令は、空襲で陸上交通と通信が麻痺している日本にとって敗戦事務処理の連絡手段がなくなるに等しかった。

日本政府は、GHQに対して主要都市間の連絡飛行再開を懇請した結果、政府の直接運営の形で九月十四日から東京を中心とする四路線の航空路確保が認められた。

機体を白く塗装、国籍標識・日の丸は禁止され緑十字に、尾部に小さな赤い吹流しを付けることが条件とされた。機種は旅客機である三菱MC-20（陸軍一〇〇式輸送機・キ57民間型）、海軍の零式輸送機と九州機上作業練習機「白菊」（K11W）の二七機が準備された。主体はMC-20で

グリーンクロスフライト
緑十字飛行と呼ばれたが、正式名称を終戦連絡定期といった。

緑十字飛行は定期運行が主であったため、北海道の飛行場は札幌北二十四条の札幌第二飛行場だったが第一千歳にも飛来した。北海道航路は、九月二十日から十月七日までの月、火、木曜日に飛来し、九日を持って禁止された。飛行禁止は連合国軍の進駐によって、米軍の独自運行が可能になったからであった。日本は一切の航空関係の活動を禁止されるに至った。

十月二十六日、札幌第二飛行場の板敷滑走路は油脂で、残置日本機は火炎放射器によって米軍の手で燃やされた。

米軍の動き

超空の要塞B-29とは全長約三〇呎の長大な機体に、二〇〇〇馬力級の排気タービン過給器装置（ターボ）付のエンジン四発を装備し、与圧装置と遠隔操作の機銃を有した日本本土爆撃のために生産されたような機体だった。最高速度は高度七〇〇〇呎で零戦と同程度、爆弾七トンを搭載して六六〇〇キを飛んだ。日本の邀撃体制が弱体化してからは、武装を外し爆弾の搭載量を増した機もあった。第二次世界大戦最高の爆撃機として評価されている。工業デザイナー的にも優れ米国の底力を思い知らされる航空機である。

八月十五日の日本敗戦後、米軍の航空機は降伏文書の調印に先立ち日本各地の飛行場に着陸していた。

B-29が千歳に初めて着陸したのは、敗戦の翌日十六日のことで第一基地でした。司令部庁舎から見て滑走路右手に駐機していました。乗組員は全員が機内に宿泊し、翌日、サイパンに飛び去りました。ソ連軍の動きを偵察に北海道まで来たのが、機体に何らかの異常があり、不時着したのではないかと思っています。米国人特有の功名心からの行動とも考えられます。この後も何度かこうしたことがありましたが、司令部庁舎に宿泊し、夜は町内の料

亭に連れて行き接待しました。米兵も喜んでいました（武藤誠・書簡要旨）。

第二〇二部隊の技術員熊谷昭は、「終戦から二日後の十七日、完成したばかりの二基地に初めてB-29が着陸した時、滑走路にはザーと一面に細かなひび割れが走りました」と回想した。

二十八日に正規の先遣隊が厚木飛行場に到着、二日後に連合国軍最高司令官の肩書きを持つダグラス・マッカーサーがダグラスC-54スカイマスター（軍用型DC-4）バターンから降立った。九月二日には戦艦ミズリー艦上で降伏文書調印式が行われた。この頃すでに第一千歳にはP-51を装備した米陸軍戦闘機部隊が進出していた。

九月に入ると戦闘機部隊と入れ替わりにB-29を主力とする長距離機が飛来、北方方面を偵察飛行していた。目的はソ連の部隊配備の動向を探るためであったという。

『新北海道史』には、連合軍の進駐は八月三十日から空と海から開始されたと記録されている。その日、カーペンター大佐一行五人が千歳に飛来、札幌警察署次席牧清吾が出迎え、札幌グランドホテルに向かった。

札幌グランドホテルの林英夫の述懐は次のとおりである。

マッカーサー総司令官が厚木飛行場に到着した昭和二十年八月三十日、千歳から二人の兵隊を連れた米軍将校が、ジープをホテル玄関に止めた。ここで「札幌グランドホテルを米軍の将校宿舎として使用する。そのため数日内にあげ渡すこと」などが決定、契約された。（増補）

『増補千歳市史』によれば九月二日には、占領軍演習場として石切山射撃場、月寒演習場、島松演習場、北恵庭着弾場、千歳小火器射撃場が接収地として決まった。九日には、第二千歳に米軍将校以下二十数人が、十日にも高級将校以下二〇人が飛来し飛行場を含む海軍施設を占領財産と指定、用地一九四四鈔を接収したという。

敗戦後、米軍の軍使と最初に接触したのが陸軍第五方面軍の福井正勝少佐だった（後に陸上自衛隊第七師団副師団長兼東千歳駐屯地司令。退官後は、米上陸部隊との決戦場になると見込んでいた早来町〈現・安平町〉役場南方の一六四高地を望む千歳・祝梅〈現・旭ヶ丘〉を終の棲家とした）。

福井は、昭和五十七年二月、千歳を知る会の定例学習会において「終戦前後の千歳の軍事史」を演題に講話を行った。この時、米第八軍の軍使に敗戦後初めて接触した時の様子を語った。九月十日のことで中型輸送機に搭乗して来たという。

私は今、祝梅に住んでおりますが、終戦の時には、第五方面軍、俗にいう北部軍の参謀をやっておりまして、（略）終戦後は米軍との折衝を主体として、いわゆる戦後処理をやらせていただきました。（略）

それから、千歳に関係のある話ですが、捕虜のことで東千歳の連山飛行場です。そこにサッターという少佐が十数名の部下を連れて来ました。北海道には四百七十人位の捕虜がおり、主に炭鉱で働いており美唄とか、赤平とかに分散しておりました。そのほか室蘭の港湾でも働いておりました。その捕虜の引き取りにきたのですが、軍の代表者が来いということでしたから、私も参りました。まだ、我々は武装解除を受けておりませんので、軍刀とピストルを提げていた訳ですが、彼等は日本の軍刀というものに非常に脅威を感じており、銃やピストルで武装していながら、我々の軍刀を外せと脅迫するのです。私は、まだ武装解除の命令を受けていない、我々はちゃんと規則に従ってやっているといって頑として譲らなかつたので、仕舞には仕舞がないと言って許してくれましたが、そういう連中を連れて、定山溪に章月というホテルがありますね、当時、章月旅館といっておりましたが、そこへ彼等を持って行って何とかなだめておったんですね。そうして、捕虜引渡しの交渉を進めまして、翌々日にはアメリカ人捕虜七十人を飛行機で、あと四百

名位は、汽車あるいは船で、小樽から送り帰り、引渡しを終わりました。

(記録・文責 千歳を知る会世話人 川村幸雄)

福井の話によると、捕虜引渡しとの交渉を行なって翌々日に米人捕虜を飛行機で送り返したとある。翌々日とは十二日であろうか。

北海道新聞記者三沢重美の『敗戦への道』に日付は不明であるが、次の記述がある。

北海道進駐に先立ち米軍の手で千歳海軍飛行場から連合軍の俘虜輸送が行われた。皮肉にもこの報道は私にお鉢が廻り丸腰の報道部の連中と一緒に週間航空隊の兵舎に詰め切った。(略) この千歳滞在中に第二千歳飛行場に沢山のB-29が降りていると見に行つた。日本の私達が「第二千歳飛行場」と呼んでいるのを彼らは「水谷飛行場」と呼びそう記された地図まで持っていた。(略) いろいろの四機のB-29が丁度いま降りたばかりらしく(略) 黙々と整備らしいことをやっていた。(略) 「これから何処へ行くか」とさ。また、三沢は、捕虜輸送の二、三日前、第二千歳で日本の四発機を見て「まさしく四発の大型機ではあるがてんで使いものにならぬ日本の飛行機を私達はこの地で見ただけである。飛ばすつもりで陸軍が試作したらしいがものにならなかつたのだろう」と記している。

日本にも中島十三試陸攻「深山」(G5N)、連山などの四発陸上機はあったが、生産機数も少なく千歳に飛来した記録もない。三沢が見た四発機は、天雷部隊の訓練のため七五一設営隊が千歳近郊の大工を総動員して造らせたB-29の木製実大模型だった蓋然性が高い。実大模型は、第三千歳滑走路の南端に置かれていたという。遠目には実物に見えるほどであったのだろう。

カーチス・ルメイ

武藤の述懐によると、B-29の焼夷弾爆撃で日本の都市を灰塵に帰したカーチス・ルメイ少将が、数日間であったが千歳に滞在したことがあった。司令部庁舎正面に向かつて二階右側奥の部屋に起居した。庁舎内でも右ポケットに拳銃を入れ、いつでも発射できるように銃把グリフをはみ出させ、葉巻をくわえていた。米軍の日刊機関紙『スターズ・アンド・ストライプ(星条旗)』は、ルメイが北海道からシカゴ郊外の航空基地まで無着陸飛行に成功、トルーマン大統領がホワイトハウスでの晩餐に招待したと伝えていた。この当時、第一千歳は日米両軍が同居状態で、残留した海軍士官は情報収集のため英字新聞を読んでいたという。

ルメイは、マリアナに基地をおく第二十一爆撃集団司令官として昭和二十年一月にグアムに着任した。これまでB-29で日本本土爆撃を担当したハンセン准将は日本のレーダーと邀撃戦闘機・高射砲を警戒して、昼間に高高度から東京・中島飛行機武蔵製作所と名古屋・三菱名古屋航空機製作所の精密爆撃を行なったが思うような効果が得られなかった。このことからルメイは、日本人は住宅でも軍需物資を造り、軍備増強に加担する労働者と決め付け、邀撃体制の不備な夜間に低高度から無差別に都市爆撃を行なうことに方向を転換した。

ルメイは三月十日の東京大空襲、十三日の大阪大空襲から低高度からの絨じゅうたん爆撃を行い、名古屋をはじめ全国で五〇万を超える市民を無差別に殺戮した。空襲は通常爆弾ではなく、焼夷弾三六発をひとまとめにした収束焼夷弾を用い、密集する木造家屋を焼き払った。

『スターズ・アンド・ストライプ』に掲載されたルメイの帰還飛行を九月二十一日付の北海道新聞朝刊は、次のとおり伝えた。

B 29三機札幌シカゴ無着陸飛行

【シカゴ十九日発SF同盟】日本からワシントンまで記録的な無着陸長距離飛行を試みたB29三機は強風のため燃料に不足を来し、ワシントンの手前六百マイルのシカゴに着陸し燃料補給の上十九日二十三時二十五分（グリニッチ標準時間）ワシントンに向ひ出発した右B29三機は北海道札幌、水谷飛行場から第一機は第二十航空隊ならびに第七十三爆撃隊オダネル第二機は戦略航空隊副司令官ジャイルズ中將、第三機は同參謀長ルメー少將をそれぞれ乗せていた

千歳所在部隊の解隊

千歳の人口は住民基本台帳によると、昭和十九年に一万七六八八人とこれまでのピークとなったが、二十年末には一万五〇五人と一気に七〇〇〇人以上も減少した。減少の実人員は一万人以上といわれている。これは、敗戦によって海軍部隊が解隊、将兵・軍属・工員・挺身隊員等が復員・帰郷したことによるものである。

千歳所在海軍各庁の解隊状況は次のとおりである（庁名はママ）。

庁名	日付	状況
第五七一設営隊	八月二十二日	解隊
第二〇魚雷調整班	九月五日	解隊
佐鎮一〇五特別陸戦隊	六月六日	解隊
霞空千歳派遣隊	十月十日	解隊
第十二航空艦隊司令部	十月一日	解隊
第九〇三航空隊	十五日	解隊
大湊軍需部千歳出張所	十五日	閉鎖
大湊施設部千歳出張所	十六日	閉鎖
北東海軍航空隊	十一月七日	解隊
第四十一航空廠	十五日	定員ヲ置カズ

第五氣象隊 十五日 解隊

大湊警備府（北海道）事務所 三十日 廢庁

大湊軍法會議千歳出張所

海軍省は十一月三十日、勅令を以て廢止された。大湊軍法會議千歳出張所は昭和二十一年三月三十一日まで存続していたと思われる。

米軍進駐前日

九月二十三日、米軍鉄道輸送部隊司令官のベッソン代將が担当將兵とともに第一千歳に飛来した。すぐに、札幌、小樽、函館、室蘭、追分の鉄道施設を視察、輸送の改善点を指摘、関連施設や優等列車の接収、札幌、小樽、旭川、函館などの主要駅のRTO（鉄道輸送事務所）開設を決めた。

占領軍である米陸軍第八軍の鉄道輸送は、MRS（軍事鉄道輸送軍）第三鉄道輸送司令部が担当。北海道と青函鉄道連絡船はMRS管下の札幌D T O（地区輸送司令部）が担任、傘下の各駅R T Oが置かれた。札幌と小樽のR T Oは、進駐軍の主力である米軍が小樽に上陸する前日の十月四日に開設された。国鉄の中に絶対的命権を有する別個の鉄道組織ができたことで、日本にとって屈辱的な進駐軍輸送の歴史が始まるのだった。

千歳駅にR T Oが開設されたのは、翌年の七月二十五日であった。

爆撃機のような大型長距離機の必要性が減ると、連絡用務・人員輸送に適したダグラスC-47スカイトレイン（軍用型DC-3）やC-54のような中型輸送機で札幌第一飛行場を使う頻度が増えていった。第一千歳は飛行場機能としては道内で最も優れていたが、札幌までの室蘭街道は未舗装で、いったん雨が降ると泥濘と化し車両の走行を阻んだ。札幌第一飛行場は現在の丘珠空港で、札幌都心に近く占領政策の準備に都合が良かった。

敗戦から五〇日目にあたる十月四日の夜、小樽沖の洋上に星条旗をたなびかせた巡洋艦、駆逐艦をはじめ、第七十七師団の將兵主力八〇〇〇名を

乗せた貨物船改造の攻撃輸送艦、大型トラックやジープなど千両の車輛を積んだ戦車揚陸艦、中型揚陸艦など五〇隻以上の米艦艇が停泊した。

翌日早朝から米軍の北海道進駐が本格的に開始される。第一千歳にも一部米兵が進駐することは事前に知らされていた。すでに米軍の先遣隊が第一千歳に入っていたが、外国人と接したことはない町民にとっては新聞などによって進駐軍に対する心構えを読んでも、不安の色を隠せなかつただろうことは容易に想像できる。

接收される北海道拓殖銀行本店別館、逓信省札幌通信局、札幌グランドホテルなど札幌市内のほか、定山溪・ホテル鹿の湯、登別グランドホテルなど水洗式トイレを備えた宿泊施設が明渡しの準備を済ませていた。

敗戦国日本の戦後が始まる前夜だった。

引用・参考文献

守屋憲治『北の翼―千歳航空史―』みやま書房 一九八五年／渡部亮次郎『園田直・全人像』行政問題研究所 一九八一年／藤井貞雄『千歳特攻隊始末記―最後の零戦パイロットたち―』一九八四年／武藤誠『いくさ世の回想』二〇〇二年／大湊警備府・第十二航空艦隊『大湊警備府／第十二航空艦隊（北海道地区）終戦処理経過報告』一九四五年／防衛庁戦史室『戦史叢書85 本土方面海軍作戦』朝雲新聞社 一九七五年／鈴木 徹『北海道の旧飛行場』二〇〇六年／全国憲友会連合会『日本憲兵正史』一九七六年

第二項 それぞれの終戦

終戦の日

昭和五十四（一九七九）年二月から八月、北海道新聞に連載された「ちとせ百年」の六月二十一日の記事に、昭和天皇による玉音放送が流され終戦を迎えた時の役場の様子が古老からの取材で次のように書かれている。

町役場の職員は当時二十二二人。事務室正面に飾った神だなを前に職員全員が整列していた。「岡本町長から、その日は外出せずに全員庁内で仕事をしているように、との命令がありまして、職員はだれもが気もそぞろでした。初めはなにをいっているのか、さっぱりわかりませんでした。放送が終わってから、町長から解説があつて戦争に敗けたことを知らされました。思わずため息が迎りから漏れたのを覚えています」。当時、町役場の配給係だった高橋知夫さんは、「八・一五」をそう思い出す。

『千歳小学校開校百年記念誌』で、二十二年卒業の石井博美が学校での終戦の日を次のように話す。

日本が降伏した日、全員が講堂に集められて天皇の放送を聞いたんですが、全然意味がわからないんです。教室へもどると、山下という女の先生が泣き放しに泣くんです。それでようやく戦争に敗けたのがわかりました。

二十年八月十五日、終戦を迎え、それまで街を支えてきた海軍航空隊は解体し、七〇〇〇人も人口が一気に減少、町は衰退の危機にさらされることとなるが、皮肉にも間もなく進駐してきた米軍により再び街は活気づくことになる。

しかし町では、進駐軍対応のほか、未復員者の留守家族や戦死者遺族の生活援護、被災帰農者や引揚者の受入れ、傷痍軍人などの問題が山積していた。さらに終戦の年は冷害による未曾有の凶作。食糧が極端に少なく、その日の命をつなぐので精一杯の状況であった。

二十年の水稲の全道収穫高は一〇〇万七七〇七石（約一五万ト）で、十八、十九年の約三分の一の収穫であった（『新北海道史』第六卷）。

太平洋戦争が始まって間もない十七年二月に制定された食糧管理法により国の統制が行われていたが、戦時末期での農村の労働力と肥料や農機具等の不足による生産性の低下、当然ながら外地からの輸入はなく、二十年以降は当時の朝鮮や台湾が日本の支配から離れたために米の移入が全くなかった。さらに引揚げ・復員者などの消費人口の増加、そして前述の大凶作が重なり、戦時中より増して深刻な食糧難となった。

そのうち、配給も「遅配」、「欠配」が続くようになり、二十一年七月末現在、道内消費地の遅配が平均六〇日以上にも及び、全国でも最悪の状況だったという（『新北海道史』第六卷）。

二十一年第一回千歳町会で、岡本幸信町長による「昭和二十年度事務報告」は、一般概況として終戦の年を次のように報告している。

昭和二十年ハ悠久二千六百年ヲ誇ル日本歴史ニ一大汚点ヲ印セル年ナリ即チポツダム宣言ノ受諾ニ伴ヒ昭和十二年ヨリ戦ヒ続ケタル今次戦争ノ敗戦ニシテ國民ハ齊シク悲憤ノ涙ヲ以テ此レヲ迎ヘ併シ乍ラ此ノ果然タル中ニ聯合國軍ノ進駐下ニヨツテ新生民主々義日本ノ胎動スル黎明ノ鐘ヲ聞キツツ急角度ニ大転換ヲ為シタル時局ハ敗戦以上ニ國家興亡ノ関頭ニ立テルアルヲ憂愁悲痛ノ心モテ之ヲ迎ヘ送リツ、アル現況ニアリ

町ハ町民ノ生活安定ト福利増進ヲ期スベク食糧増産ト之ニ資スベキ土地改良其他ニ対シ各種団体ト緊密ナル連絡ヲ為シ其ノ協力ヲ得テ最善ノ努力ヲ為シタルモ本年ハ稀有ノ冷害凶作ノ為メ食糧ノ確保ハ思フニ委セズ昭和二十一年ノ食生活ハ一大脅威ヲ東スニ至リタルハ遺憾トスル所ナリ又國民貯蓄ハ終戦ニ伴ヒ頓ニ増加シタリト雖モ町民ノ自覚宜シキヲ得本年度増加目標額ヲ保持シ得タレハ欣ブベキコト、ス次ニ戦役軍人ノ援助傷痍軍ノ援護等ニ関シテ

ハ銃後奉公会其ノ他関係諸団体ト相提携シ共ノ遺漏ナキヲ期シタリ本町ハ終戦ニ依リ当町所在ノ海軍ハ解隊セラレ軍作業廳タル海軍第四十一航空廠ハ閉鎖セラレテ人口ハ頓ニ激減シ往時ノ一寒村ニ逆行セシ憾アリタレド其ノ後聯合國米軍の進駐アリテ其ノ労務要員ノ募集ニ伴ヒ再ビ終戦前ノ賑カサヲ取戻スコトニナリ将来國際的一大航空港トシテ約束セラレタルノ感アリテ本町ノ前途ハ益々多事ナルヲ覚ユル次第ナリ、昭和二十年中事務ノ概況叙上ノ如クニシテ各種施策等ニ遺憾ノ点アルモノト認ムルモ昭和二十一年ハ各機関並町民ノ援助ニ依リテ其ノ全キヲ期セントスル次第ナリ

衛生面では、全道的に赤痢が蔓延し町内でも集団発生をみることもあった。二十一年度の伝染病発生状況は表7-1のとおりである（昭和二十一年度事務報告）。

海軍基地からの物資放出

商業組合の草創期、後の千歳商工会設立時の事務長を務めた門脇貫一郎の日記によると、戦時中、千歳商業組合は、戦時経済の末端機関として千歳配給統制組合として生活物資等の配給機関となる。終戦時、千歳の場合には海軍航空基地が解隊、米軍に接收されることになると、進駐前の措置と

表7-1 昭和21年度伝染病発生状況
(昭和21年度事務報告)

病名	発生数	全治数	死亡数
腸チブス	五	五	
パラチブス	三	三	
赤痢	一九	一四	五
流行性脳脊髄膜炎	一	一	
デフテリア	一〇	八	二
猩紅熱	二	二	
発疹チブス	二	二	
痘瘡	四	三	一
計	四六	三八	八

表7-2 第41海軍航空廠引渡目録 第二復員局軍需品目録 (昭和20年8月部外移管の分/防衛省防衛研究所図書資料室所蔵)

月日	8月25日	移管先	千歳町役場	月日	8月25日	移管先	千歳国民学校
品名	数量	品名	数量	品名	数量	品名	数量
四呎旋盤	1台	暖炉	300個	机	20	玄能	1,000
型削盤	1台	本立	8	椅子	20	ノミ	500
鋼材	500疋	書籍函	1	戸棚	3	丸椅子	200
事務机	65	衝立	1	長椅子	1	雪カキ	50
椅子	74	電話器	3	表紙	100枚	玄能杯	1,000
粉炭	200,000疋	黒板	1	バット	10個	庭箒	3,000
中古自動車	1台	トタン板	14,500疋	ネット	14	鉤	150
ベニヤ板	3,420枚	ガソリン	700立	ラケット	40	セメント	10袋
硝子	24箱	自動車タイヤ	7本	綴紐	4束	ベニヤ板	20枚
エポナイト板	120疋	起重車	1台	ベース	6組	蚊帳	1梱
月日	8月25日	移管先	千歳農業会	書類挾板	37個	帆布	1束
品名	数量	品名	数量	映写器	2台	羽布	1包
鎧鉄	1,000疋	木材	200石	拡声器	2個	書類入箱	10個
ドラム空缶	36個	馬車	1台	タイプライター	2	木槌(大)	2俵
竹	500本		(馬1頭付)	オルガン	1	木槌(小)	3俵
月日	8月25日	移管先	千歳郵便局	黒幕	20	煙筒刷毛	10個
品名	数量	品名	数量	作業台	9	桶	5
机	5	輪転謄字器	1	大太鼓	1	レーキ	100
椅子	5	書類函	1	小太鼓	1	ホーク	100
本立	3	金庫	2	ヴァイオリン	2	ペン先	50箱
戸棚	3			ラッパ	1	クリップ	14箱
				クラリネット	1	インク	384本
				笛	2	虫ピン	1函
				セロ	1	白紙	14,000枚
				ギター	1		

※企業や個人、他市町村分は除く。

して基地内の生活物資が放出される。その保管責任を負ったのが配給統制組合であった。「品目は、米・ミノ・シヨウ油・カン詰その他の食料品・軍衣・毛布・衣料品などで、その量はぼう大なもので組合倉庫にはとても入りきれず、町内の倉庫を一時借用五カ所ばかりに分散入庫した。当時これらの軍放出物資は庶民にとって誠に貴重なものであった」という。しかし終戦の混乱時、夜には盗みにくる者が多く、組合、役場、警察が盗難防止に頭を悩ませていたとある。

また、防衛省防衛研究所図書資料室所蔵の第四十一海軍航空廠から抛出された物資リストから市内施設への移管を抜粋すると表7-2のとおり。

千歳毎日新聞の昭和三十三(一九五八)年に掲載された企画記事「チトセの生立ち」で、終戦時の軍の物資持ち出しについて、米軍の進駐前に、基地からの資材物資の分散、隠匿、棄却、焼却などがはじまり、わが家に持ち運ぶ窃盗的行為をする町民が続発したとある。これは物資の欠乏ばかりではなく、特に書類の処分は機密事項のこともあり、進駐軍の手に渡った場合の後難を恐れ、敗戦国民の最後の自衛措置であったという。衣料や食糧は大部分が隊員や町内に分散贈与されたが、隊員によるガソリンなどの持ち出し隠匿や、諸施設の材料として保管されていた木材などが持ち去られることも相次いだ。

同記事によると、後に進駐前の軍需物資の不正処分について米軍と警察の捜査により、日本の兵隊の隠匿はほとんどが摘発された。また、町の有力者や町役場も摘発されたとある。また、日本兵からの贈与や許しを得て受け取った者も気が気ではなかったらしいが、比較的軽微と思われる者には対価(ほんの申訳的な価格)を支払わせて納めたともある。

学校
千歳小学校開校八〇年記念誌『清流八十年』の「沿革」の中で、終戦時

のことを次のように書いている。

全国民、特に教師を含めての勤労者の生活はどん底に落ち込んだ。払下げの軍服と軍靴。くじ引きでやつと手に入れたズック靴、モンペスフまじりの上衣、それが当時の教員の服装であった。児童に就いては云うまでもない、一学級に年五〜六名分位のズック靴、服、長ぐつなどの購入券が配給になるだけである。当時の学級日誌に依れば、四月当初学校長が朝礼に、「暖クナツタカラ足袋、靴下ヲハカヌコト」「長靴ヲソマツニハカヌコト」など訓話していることにも、当時の様子が窺い知れよう。

また、『清流八十年』に掲載された当時の食糧事情を表わすものとして、昭和二十二（一九四七）年の昼食の実態調査によると、調査日の出席者六三九人のうち、代用食六八人、不持参三一人、混食二二三三人、米飯五九人、帰宅二四九人となっている。混食・代用食の内容は、麦や粟ならいいほうで高粱、唐黍、南瓜、薯、澱粉などであったと書かれている。また、「帰宅」というのは、雑炊などで弁当として持参できないために帰宅して昼食をとっていたのであろうと推測しているが、家に戻っても何もなく時間をつぶして戻っていた子も多かったという。

同誌の回顧録で、復員後に教職に戻った上井正義は、

(略)

当時はマッカサー元帥の命令で軍国主義的色彩を日本国中から追放すべく教育界にもその命令は出され、教科書の中でそれらしい所は切り取るか墨でぬりつぶすかしなければならず、子供等は墨で真黒によこれた教科書を使用し、図書棚から今までの書籍のほとんどを取り出してくず屋に売らうやら、物置の奥から木銃を取出して焼く等、敗戦のうめきは日本中の学校を混乱に落し入れたが千歳はアメリカ軍の進駐もあって特にひどかったものだ。児童は毎日落着いた学習も出来ず、僅かな配給学用品を持って粗末な身なり

で登校していた。本当に可哀相な毎日であった。(以下略)

同時期の教諭、栃本唯志も『千歳小学校開校百年記念誌』にて、学校の廊下には一面イタドリが葉が乾燥敷きつめられ、敗戦の惨めさ、物資不足の姿が至るところ散見され、授業時間を割いては雑木林を開墾し馬鈴薯の植付けをしたり、或いは町内会から狩り出されて基地内の滑走路補修にコールトール入りのドラム缶を担いだ時代であった。

勿論物資は配給、米も魚も、一口飲めば終わってしまう酒までも全て切符制によるものであったし、衣服、靴さえ学級に何足か割当があり、黒板を使って抽選をし、歓声をあげたことや、斉藤商店の前に鍋を下げ列をつくって魚の配給を受けたことなど、今にして思えばまるで嘘のような思い出である。

二十二年卒業の高塚興正は物不足だった終戦直後を

五年生の頃でしたか、登校してもそんなに授業をしないで、もっぱら食糧の調達に出かけました。たとえば、イタヤの木から汁を取ったりイタドリや柏の葉を集めるとかです。教室にグラフを貼ってありましたが、それは成績表ではなく、誰が何を何取ってきたかという収穫の結果をあらわすものでした。(中略)学校がどこからか土地を借りてきたんでしょね。そこへ鋤をかついで出かけました。ソバを植えた記憶があります。

また、二十四年卒業の富樫お京は、

靴の配給の時などはつらい思いをしましたね。くじを引いて、配給の当たる子と当たらない子ができるのですからね。私は一度も当たったことがないので、いつもうらやましい思いをさせられました。

子供達、そして子供の生活環境を守ろうとした教師たちは激しい混乱の中で必死に生き抜いていた。

農家

千歳町議会「昭和二十年事務報告」の中で農産について、「数十年来稀

有ノ冷害ト肥料皆無、勞力不足等ノ各種障害ニ依リ粒々タル辛苦艱難モ一トシテ報ヒラレ得ズ、加ヘテ世紀ニ銘記セラル、終戦ノ一大事詳ニ遭遇此レガ精神的ニ一大衝撃ハ遂ニ物心両面ノ一大破局ヲ見ルニ至リタリ即チ意氣阻喪志氣沈滞今後ノ農業経営ニ指導ニ特ニ祖國再興ノ將來ニ憂慮ニ耐ヘザル窮境ニ逢着セリ」といくつも重なった窮状を報告している。

米の実収状況を比較してみても、昭和二十年の六九八石は、二十一年の一九二四石と比較してもいかに厳しかったかがわかる。

しかし一方で、農家では敗戦の混乱で食糧不足となったことにより、一時的に農業経済が異常に潤ったという側面もあった。それは闇買いの横行によるものである。市街地から日々の食べ物に窮した人たちが着物や貴金属などを持って、野菜や米との交換を求めてやって来たという。

また、戦争末期になると食糧の配給にも事欠く状況となった政府は、被災帰農者を北海道へ送る緊急開拓団を組織し食糧増産を図った。しかし、第一陣となった東京からの二三戸の被災帰農者団体は函館で敗戦を知り、室蘭線三川駅に降り立ったのは二十年八月十六日、終戦の翌日であった。現地でも人手不足の上に農繁期であったため、板や莛、麦稈で手当てした宿舎で受入れ、合宿生活となった。柴田権次郎が世話人となり、休閑地や自己所有地の一部を貸して、越冬のための野菜や秋蒔作物の作付けをさせた(『市史』)。

第二次入植として、同年十月二十二日には静岡隊二八戸、秋田隊一四戸と続々と入植してきた。「昭和二十年事務報告」によると、東京団は龍丑内十林班及幌加十九林班の国有林内、静岡団は長都防風林、秋田団は近唐国有林に入地予定となっている。これらの入植者用住宅が、札幌財務局千歳管財出張所の援助により、二十一年度には三団体合計五七戸が建築されている。さらに翌年には、外地からの引揚者及び復員者二男三男、二十二

年には長野県から七四戸、道内及び戦後隊三七戸が長都に入植している。畜産では、終戦に伴って軍馬資源保護法が撤廃されるが、種馬統制法に基づき優秀な千歳産駒を産出した。

林業では、戦時中での艦船や飛行機用材として供出されたが、戦後は戦災復興用材に振り向けられて供出された。

また、農村地区の電化は資材難・資金難の中でも進められ、「二十一年度事業報告」に次のとおり成果状況が報告されている(表7-3)。

表7-3 農村地区電化成果状況(昭和21年度事業報告)

区域	点灯戸数	動力箇數	摘要
下釜加	一八	五(二五馬力)	配電完了
上新剣湖	二五	三(二〇馬力)	全
末広	五〇	一六(三六馬力)	工事完了
嶮測	八二	一六(三六馬力)	工事契約完了
長都	一〇〇	五(二五馬力)	資材入手完了

郵便

昭和十八年から平成七年まで、戦中戦後を通じて五〇年間以上千歳で郵便の配達をしてきた葛巻芳太郎(昭和四年生まれ)に聞いた。

戦時中の電報の配達は、危篤の知らせや「マル」(お金のこと)を送れるとの電報が多かった。赤がトレードマークの自転車も、戦時中は赤く塗らずに黒かった。郵便局員はどこへ入るのもパスは要らなかった。航空隊の施設に入るのもノーパスで特別扱い。灯火管制が敷かれる中、夜は暗闇の中の配達となった。「懐中電灯は持っていくけど、点けながら歩けないから、家を確認するだけにしか使えなかった」という。

終戦とともに米軍が進駐してきた。「米兵への手紙や荷物も配達した。基地内に入るには身分証明書が必要だったが、中に入ってからの行動は自由だった。ハウス番号が表示してあったから少しはわかりやすかったけ

ど、探すのは大変だった」。

千歳駅に着いた郵便物は、自転車に付けたリヤカーに積み込んで局まで運んだ。チューブのないタイヤの自転車で、びっしり詰まった郵袋一五から二〇を積んだりヤカーを必死に引っ張った。「動かないんだよな。時間にもかなり厳しい。到着の時はまだいいけど、差出しの時は間に合わないわけにいかない」。幸いなことは、駅から局までの道は既にコンクリート舗装されていたこと。自転車の使えない冬は歩いて長距離の配達、今からは想像できないほど苛酷な仕事であった。

消防

終戦から昭和五十六年までの三五年間、消防職員として勤務し第四代消防署長を務めた高橋五郎（大正十年生まれ）は、戦時中は海軍航空隊の通信科に所属し、長都にあった通信所に勤務、無線の受信や司令部への送信を行っていた。その通信所の屋外スピーカーで玉音放送を聞いた。

その後、昭和二十一年八月に常備消防員として千歳消防団に入った。終戦時、消防は警防団の時代。戦時中は空爆火災等に対する防空監視のために常備員が二名配置されていたが、終戦後は進駐軍兵舎等の消防の任にあたるため増員された。警防団は、二十二年の制度改正により消防団となる。常備消防員の二四名は進駐軍の命により米軍基地に移換され、市街地の常備員は高橋を含め二名の配置となる。「当時の団長は、山三ふじやの渡部栄蔵、副団長は朝日屋旅館の前田政太郎でした。ほかに山崎さんなどが、自腹を切って、服や帽子を揃えるなどよく面倒を見てくれた。前田さんの朝日屋旅館で風呂をいただくなど可愛がってもらった」。

終戦直後、最初に米軍が進駐して来たころは、まだ市街地の建物もまばらで火事も少なかったという。しかし、オクラホマ師団が来て、バラックが隙間なく建並ぶようになってから、「あの頃は、火の取扱いが悪くて、

一日に何回も出動ということもあった」。

警防団から引き継がれた装備は、一〇年は使っているフォード車、旧日本海軍で使用していた消防ポンプ自動車、三輪ポンプ自動車各一台。「放水には用水から水を汲み上げた。用水が街中を通っていたので他の町と比べて恵まれていた」。また、「基地から米軍の車が出てきたときに、知っている連中がいるわけだから、ホースや修理用のパッチをもらったりもしていた」。敗戦直後でとにかく物が不足していた時期、米軍進駐による混乱も大きかったが、旧海軍の払下げや米軍基地からの物資などに助けられた面も大きかった。

警察の手も足りなく、特に自治体警察の時代は、消防職員が頻繁に駆り出された。「子どもが用水に流された、殺人犯が山に逃げたなど、警察から応援を頼まれました。役場には話しておくからと。人命救助で警察署長から感謝状をもらったこともあった」。

駐留軍要員は厳しい就職難の時代に破格の高賃金であった。全国から多くの人が流入し、海軍航空隊の解隊に伴う七〇〇〇人も人口減少も、その魅力によって補われた。しかし一方で役場などでは、技術や能力を持った人材の確保に苦慮していたという。

光の见えないような苦境、後のさらなる混乱の中、農家、学校や役場、消防、郵便、警察など、まちを地道に支えた人がいて人々は厳しい環境を必死に耐え抜いた。

参考文献

浅見勝夫「チトセの生立ち」千歳毎日新聞社 一九五八年／北海道新聞社「ちとせ百年」一九七九年／千歳小学校『清流八十年』（開校八〇年記念）一九五八年／『新北海道史』第六卷 一九七七年

第三節 終戦処理

軍人遺家族

前述のように日中戦争以降の現役入営者・入団者は六七三名、応召者数は五三七名、合計一二一〇名に及んだ。

千歳町「昭和二十年度事務報告」によると、昭和二十一年一月二十五日現在で復員者は四二〇名、その内訳は内地より四〇一名、「北支中支」より一三名、樺太より三名、沖繩より三名であった。一方、未復員者は三〇〇名とされ、その内訳は、樺太三八名、沖繩三一一名、北千島二六名、満洲六八名、「北支中支」三八名、朝鮮二五名、台湾一〇名、「ビルマ方面」九名、其ノ他太平洋諸島一一名であった。敗戦の時点で確定していた戦病死者数は七四名であり、未復員者中戦死と推定される者は少なくとも三〇名に達するとみられていた。

出征者留守家族や戦死者遺族、傷痍軍人に対する援護は、敗戦後も引き続き重要な業務であった。留守家族については、「満洲、北鮮、千島、樺太等ソ連統治下ノ状況全ク不明ニシテ家族ノ心情察スルニ余アリ当町ニ於テハ札幌地方世話部ヲ始メ各関係方面ト緊密ナル連絡ノ下之レガ状況ノ把握周知徹底ニ努メツ、アリ更ニ又家族ニ対シテハ医療生活援護等凡ユル方途ヲ以テ遺憾無キヲ期シツ、アリ」と、出征者の安否の状況を把握するとともに、医療や生活援護等がなされた。留守家族で法的援護を受けている者は、九名、町援護会の援護を受けている者は、一七名であった。

戦死者遺族に対しては、GHQの指令により軍人恩給が停止されたため、生活援護等が必要となった。また「靖国神社合祀等手続き迅速処理」にも「万全」が期された。遺族で法的援護の受給者は二名、町援護会による援護受給者は四名であった。

傷痍軍人は三七名で、「大部分ハ身心共ニ健全トナリテ新日本建設ニ再起奉公ヲナシツ、アリ」とされる。療養所入所者は三名、自宅療養者は四名であった。

「昭和二十一年度事務報告」では、軍人遺族の世帯数について印刷状態が悪く判読しづらいが、一一八世帯とあるように読める。そのうち生活保護を受けているのは一〇世帯三八名であった。傷痍軍人は四九名、うち生活保護受給は「一戸」、未帰還者は一四一名、その家族で生活保護受給は二二世帯九三名であった。

「昭和二十三年一般事務報告」には、戦死公報受領数一二、遺骨伝達数一〇とある。軍人遺族は一七八世帯一八一名、傷痍軍人は三四世帯三四名となっていた。ソ連から三三名、樺太から一〇名の軍人・軍属が復員した。その時点での未帰還軍人は六六名であった。

外地引揚者

敗戦前後より罹災者や外地引揚者などが多く千歳町に転入した。昭和二十年の時点での戦災者および引揚者の状況は表7-4のとおりである。罹災者は九八世帯四一五名であった。罹災地で最も多いのは東京であり、静岡がそれに次いだ。引揚者は六四世帯二三七名で、引揚地のほとんどは、樺太であった。

二十一年の時点では罹災者は二三六世帯一〇五三名に達した。うち生活保護受給は三二世帯一四六名であった。また引揚者は二八八世帯一一三五名（樺太五六六、朝鮮三六、中国一二九、満洲三五三、その他五一）に達した。うち生活保護受給は五四世帯二四九名であった（昭和二十一年度事務報告）。生活保護受給割合を世帯ベースで見ると、罹災者一三割、引揚者一八割と引揚者の方がその割合が高い。

二十二年七月末現在では、引揚者は四一八世帯、一五九一名に達してい

表7-4 罹災者・引揚者(千歳町)

罹災者 (98世帯・415名)			引揚者 (64世帯・237名)		
罹災地	世帯数	世帯人員	引揚地	世帯数	世帯人員
東京都	48	186	樺太	58	215
大阪府	7	28	満州	3	13
仙台	6	25	南洋群島	3	9
広島	4	13	外地帰還不能者 (15名)		
長崎	3	16	外地ニ於ケル住所	世帯数	世帯人員
横須賀	4	18	樺太		15
静岡	21	98	総計	162	667
根室	5	31			

註 「昭和二十年度事務報告」『町会議決報告』昭21より作成。

(なお転出者は一七戸四五人)。

引揚者で住宅を確保したのは二二六戸、その内訳は個人住宅七六戸、間借り一一二戸、集団収容施設三五戸、その他三戸であった。一方、住宅を確保していないのは一九二戸、内訳は一時他人の家に間借り五七戸、一時縁故先に間借り八八戸、一時収容施設に入っているもの四五戸、その他二戸であった。

第二に食糧である。二十二年においては、「特に北海道の食糧事情は誠に深刻なるものがありまして本町に於ても六五日の欠配状態にありまして一般は勿論本年春以降入町の引揚者は一坪の野採をも耕作する土地もなく他に求めるにも金はなく又入手の方法もなく実に惨たる状況にありまして。特に施設に収容の無縁故者及長野隊帰農者に於ては越冬を目前にせつ

る(「引揚者等の現況と将来の対策」)。

引揚者に対して必要となったのは、第一に住宅であった。「緊急開拓方面に於て五ヶ年計画三萬町歩、開拓者四千戸入地と云ふ膨大な計画により北海道の千歳として有名となりたるため目下各町村又は函館より直接引揚者が本町を目標として転入しつゝ、ある」状態で、住宅難は深刻化しており、人口を戸数で割ると市街地では一戸当一三・五人にもなった。二十二年五月から七月の引揚者は三九戸一四八人であったが、他市町村からの転入者は、六六戸一九六人と引揚者を上回った

かくの配給物資もほとんど食糧と交換せられ然かも全家あげて稼働して月々四、五千円の収入ありながら食糧購入の金にも満たない実情を呈し誠に見るに憚びない状態にあつたのであります」とされるような状況であった。そこで千歳町は応急措置として、「元軍用古身欠練の特配並に雑こく等の重点配給を実施」した。また民生委員が中心となり食糧の割愛運動を行った結果、長都・中長都・釜加の各連合会より、米一斗、大麦三斗、そば三斗五升、給米二升、混合豆五斗五升、きび粉二升、大豆三斗二升、小麦二升、木臼小学校児童より混合豆一斗、小豆一升、米五合が集まり、無縁故者一名のほか三八戸一五五名に配給がなされた。

第三に職である。引揚者のうち「稼働能力を有するもの七二八名が失業する事なく夫々職業につき一日も早く一般の生活水準に達せんと燃え上げる更生意欲のもと涙ぐましい努力をつぎつぎ居」とされている。職業の分布は表7-5の通りである。引揚前に農業、工業、商業に従事していた者が現在も同じ職業についているものは半数以下で、「現在の職業は進駐軍関係並に開拓面に於ける日雇が主」という状況であった。「その他」が進駐軍関係に当るものと思われる。引揚者中の商業経験者は「適當なる授産施設を積極的に要望し」、引揚連盟支部、民生委員会等との連携のもとに、引揚者マーケット、臨時露店市場、ゴザ工場、木工品加工工場、羊毛加工工場、ミシン授産場、製紙工場、水産物加工工場、総合小工業工場の授産施設計画が立てられた。

表7-5 引揚者職業(千歳町)

	引揚前	現在
農業	203	95
水産業	15	-
鉱業	-	10
工業	122	43
商業	125	28
林業	87	88
交通業	33	21
公務自由業	102	56
家事使用人	5	-
日雇	26	115
その他	9	367
合計	728	728

註(1) 『町会議案(議決録)』昭22より作成。

(2) 合計数が合わないが、原典のまま。

第四に生活保護である。生活保護についてはすでに述べたように軍人遺家族や罹災者でも必要とされたが、引揚者において特に必要とされた。二十二年七月末現在における千歳町の生活扶助受給者は二〇六戸八一五人、予算は一〇〇万円に及んだ。受給者の内訳は、罹災者三三戸一三八人、引揚者一四七戸五六五人、戦死者遺族五戸二九人、軍人家族一一戸四七人、一般困窮者一〇戸三六人と大半が引揚者であった。被扶助者の約半数の四八八人は「十六歳未満の幼者」、一三六人は「老者」、二二一人は「病気傷痍、其の他」を原因とした（以上「引揚者等の現況と将来の対策」）。

同胞援護会

昭和二十一年三月十三日、恩賜財団戦災援護会および恩賜財団軍人援護会が合併し、恩賜財団同胞援護会が設立された。

戦災援護会は、十九年十月一日、小笠原諸島や西南諸島の本土引揚者保護のために設立された財団法人戦時国民協助義会（会長は相川厚相）を前身とする。空襲が激化するなかで援護の重点を戦災者に置くことが必要となり、翌二十年四月二十八日、戦災援護会と改められた。そして戦災援護会に関する詔書および一〇〇〇万円の下賜金を受けて、五月十八日以降、恩賜財団と称した。総裁には高松宮が就任し、各都道府県に支部が設置され、知事を支部長とした。

また軍人援護会は、昭和十三年十一月五日、軍人援護に関する詔書および下賜金三〇〇万円を受けて設立された組織であり、軍人遺家族等に対する援護を担った。道府県に支部が設置され、市区町村に設立された銃後奉公会が下部組織の役割を担った。

同胞援護会の総裁には高松宮、会長には公爵・徳川家正が就任した。同会は、罹災者、引揚者、軍人遺家族、傷痍軍人などに対して、「速かにその生活を再建せしむるの素地を与えるとともに、自立自営の旺盛なる意欲

の涵養に努め、真に生活力を復興せしめ、もつて平和日本の建設に寄与せしむる」ことを目的とした。

各都道府県には支部が設置され、北海道支部は二十一年四月一日に設けられた。支部長には道知事、副支部長には道民生部長および北大総長を務めた今裕が就任した。援護の比重は、応急援護、生活必需品支給に置かれた。応急援護としては、罹災者、引揚者、軍人遺家族その他困窮者に対して、一人に付三〇〇円乃至一〇〇〇円の一時的な生活援護金支給、収容施設に在る者に対して一人一円五〇銭以内の慰問品支給、戦災死亡者一名に付一〇〇円（本部五〇円・支部三〇円・市町村二〇円）の弔慰金給与、戦災重傷者一名に付七〇円（支部六〇円・市町村一〇円）の見舞金給与、引揚の途上または上陸地において死亡または出産した者に対して二〇〇円の贈与、他市町村に転住希望者に旅費の実費給与がなされた。また生活必需品支給として、布団一組無償給与、牛酪・牛乳・練乳・チリ紙・キャラメル・沢庵・食器・ストーブ・焔炉・学童服・軍手・浅靴・襦袢・袴下・その他一般食料品など生活必需品の調達、一世帯七〇円乃至一〇〇〇円の燃料費補給がなされた（『恩賜財団同胞援護会会史（上）』）。

支部の下部機構として、各市支庁に支会、町村に分会が設置された。千歳町分会においては、昭和二十一年度予算は二万七七五〇円、収入は主に「去会員一戸十円の二〇、〇〇〇円に依り充当」させた。主な支出は生活保護の増額を要する九〇世帯への毎月一二〇〇円の支出であった（『昭和二十一年度事務報告』）。

参考文献

千歳町「昭和二十一年度事務報告」『町会議決報告』昭和二十一年／同「昭和二十一年度事務報告」『町会議決報告書』昭和二十二年／同「昭和二十三年一般事務報告」

『諸会議』昭和二十四年／同「引揚者等の現況と将来の対策」『町会議案（議決録）』
昭和二十二年／恩賜財団同胞後援会『恩賜財団同胞援護会会史（上）』ゆまに書房、
二〇〇一年復刻版

